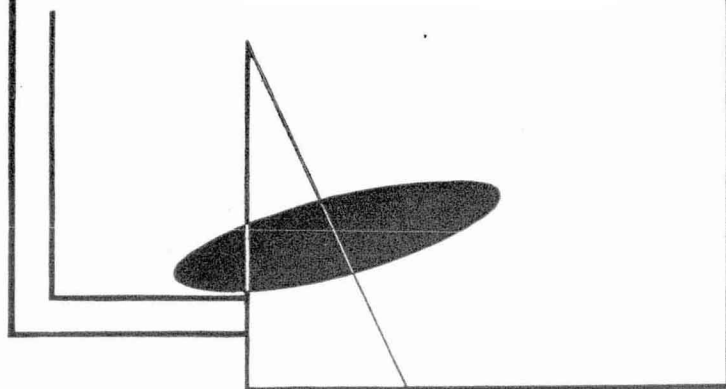




岡本かの子
林芙美子
宇野千代
集

現代日本文學全集

45



筑摩書房版



岡本かの子
林 芙美子
宇野千代集

昭和二十九年二月十日 印刷
昭和二十九年二月十五日 發行

著者

岡本かの子
林芙美子
宇野千代

發行者

古田晃
東京都文京區台町九

印刷者

山田一雄
東京都青梅市根ヶ布三八五

發行所

筑摩書房
東京都文京區台町九

電話小石川(92)五一・二〇五七
振替 東京 一六五七六八

クロース 日本クロス工業株式會社
印刷 株式會社 精興社
製本 和田製本所

岡本かの子集 目次

母子敍情……………五

鶴は病みき……………五

花は勁し……………六

渾沌未分……………七

老妓抄……………八

東海道五十三次……………九

鮎……………一〇

家靈……………一七

雛妓……………二三

林 芙美子集 目次

放浪記……………一四三

風琴と魚の町……………一四七

清貧の書……………一五七

晩菊……………一六九

宇野千代集 目次

色ざんげ……………三八

未練……………三九

別れも愉し……………三八

人形師天狗屋久吉……………三七

岡本かの子（龜井勝一郎）……………三九

林芙美子論（中村光夫）……………四〇

最も善く出来た田舎者（青山二郎）……………四一

解説……………四二

年譜……………四三

装幀 恩地孝四郎

岡本かの子集

家生所祭等寺阿耨
多羅三藐三菩提心妙法
蓮華經讚也善善以海
普門品 完卷

忍和子
謹言

母子敘情

かの女は、一足さきに玄關まへの庭に出て、主人逸作の出て来るのを待ち受けてゐた。

夕食ころから静まりかけてゐた春のならひの激しい風は、もう、びつたり納まつて、ところどころ屑や葉を吹き溜めた箇所だけに、狼藉の痕を残してゐる。十坪程の表庭の草木は、硝子箱の中の標本のやうに、くつきり葦目立つて、一きは明るい日暮れ前の光線に、形を截り出されてゐる。

「まるで眞空のやうな夕方だ」

それは夜の九時過ぎまでも明るい歐洲の夏の夕暮に似てゐると、かの女はあたりを珍しがりながら、見廻してゐる。

逸作は、なか／＼出て来ない。外套を着て、帽子を冠つてから、あらためて厠へ行き直したり、忘れた持物を探しはじめたりするのが、彼の癖である。

洋行中でも變りはなかつた。また例のが始まつたと、彼女は苦笑しながら、靴の踵の踏み加減を試すために、御影石の敷石の上に踵を立てて、こち／＼表門の方へ、五六歩あゆみ寄つた。門扉は、門がかけてある。そして、その門の

上までも一面に、蜘蛛手形に蔓の蔓が匍つてゐる。扉は全面に陰つてゐるので、今までは判らなかつたが、今かの女が近寄つて見ると、ぼちぼちと紅色の新芽が、無数に蔓の蔓から生えてゐた。それは爬虫類の掌のやうでもあれば、吹きつけた火の粉のやうでもある。

かの女は「まあ！」といつて、身體は臆してうしろへ退いたが、眼は鋭く見詰め寄つた。微妙なものの等の野性的な集團を見ることは、女の感覺には、氣味の悪いところもあつたが、しかし、芽といふものが持つ小さい逞しいのちは、かの女の愛感を牽いた。

「こんな腐つた髪毛のやうな蔓からも、やつぱり春になると、ちゃんと芽を出すのね」

かの女は、こんな當りまへのことを考へながら、思ひ切つて指を出し、蔓の小さい芽の一つに觸れると、どういふものか、すぐ、むす子のことを連想して、胸にくつくと込み上げる感情が意識された。

かの女は、潜り門に近い洋館のポーチに片肘を凭せて、そのまゝむす子にかゝる問題を反芻する切ない楽しみに浸り込んだ。

洋畫家志望のかの女のむす子は、もう、五年も巴里に行つてゐる。五年前かの女が、主人逸作と洋行するとき、一緒に連れて行つて、歸國の時そのまゝ残して来たものだ。

今日の晝も、かの女は、賢夫人で評判のある社交家の訪問を受け、話の序に、いろ／＼むす子の、巴里滞在について質問をうけた。

「おちひさいのに一人で巴里へおのこしになつて……嚴しい立派なおしこみですねえ。それに、爲替がたいへん悪いといふではありませんか。大概な金持の子も引き上げさしてしまふといふのに、よくもねえ、さぞ、お骨が折れませう。その代り、いまいに大した御出世をなさいますぜう。おたのしみで御座いますねえ」

その中年夫人は黙つてゐるかの女に、なほも子供の事業のため犠牲になつて貢ぐ賢母である、といふふたつな讃辭をしきりに投げかけた。

事實 かの女自身も、むす子に送る學費のため、さうたう自身を切り詰めてゐる。また、甘い家庭に長女として育てられて来たかの女は、人に褒められることその事自體に就いては、決して嫌ひではない。で、面會中はかなり好い氣持にもなつて、讃めそやされてゐた。

だが、その賢夫人が歸つて、獨りになつてみると、反對に、にが／＼さを持て剩した。つまり夫人がかの女を、世間普通の賢母と同列に置いた見當違ひが、かの女を焦立たせた。それは遠い昔、たつた一つしたかの女のいのちがけの、辛い悲しい戀物語を、ふざけた浮氣筋や、出世の近道の男釣りの經歷と一緒に噂される心外な不愉快さに同じだつた。

なるほど、かの女とても、むす子が偉くなるに越した事はないと思ふ。偉くなればそれだけ世の中から便利を授かつて暮して行ける。この意味からなら願つても、むす子に偉くなつて貰ひたい。しかし、親の身の誇りや満足のためな

ら、決してむす子はその道具になるには及ばない。實をいふとかの女も主人逸作と共に、時代の運に乗せられて、多少、知名の紳士淑女の仲間入りをしてゐる。そして、自身嘗めた経験からみたさういふ世の中といふものに、親身のむす子をあてはめるため、叱つたり、氣苦勞さすのは引合はないやうな氣がする。

「では、なぜ？」とかの女はその夫人には明さなかつた、むす子を巴里へ留學させて置く氣持の眞實を久し振りに、自問自答してみた。まへにはいろ／＼と、その理由が立派な趣意書のやうに、心に泛んだものだが、もうそんな理窟臭いことは考へたくなかつた。かの女は惱ましうに、帽子の鑢の反りを直して、吐き出すやうに自分に云つた。

「つまりむす子も親もあの都會に取り憑かれてゐるのだ」

やつと、逸作が玄關から出て來た。畫描きらしく、眼を細めて空の色調を眺め取りながら、「見ろ、夕月。いゝ宵だな」

といつて、かの女を急ぎ立てるやうに、先へ潜り門を出た。

かの女と逸作は、バスに乗つた。以前からかの女は、ずつと外出に自動車を用ひつけてゐたのだが、洋行後は時々バスに乗るやうになつた。窓から比較的ゆつくり街の門並の景色も見渡して行けるし、三四年間居ない留守中に、がらりと變つた日本の男女の風俗も、乗合ひ客によつ

て、手近に觀察出来るし、一ばん嬉しいのは、何と云つても、黒い瞳の人々と膝を並べて一車に乗り合はすことだつた。永らく外國人の中にぼつんと挟まつて暮した女の身には、緊張し續けてゐた氣持が、かうしてゐると、湯に入つてほごれるやうだつた。右を見ても左を見ても、日本人の顔を眺められるのは、歸朝者だけが持つ特別の悦びだつた。

わけてかの女のやうに、一人むす子と離れて來た母親に取つて、バスは、寂寥を護つて呉れる團欒的な乗りものだつた。この點では、電車は、まだ廣漠とした感じを與へた。

バスは、とき／＼揺れて、呟き聲や、笑ひ聲を乗客に立てさせながら、停留場毎に几帳面に、客を降りさせて行く。山の手から下町へ向ふ間に二つ三つ坂があつて、坂を越すほど街の灯は燦き出して來る。そして、これが最後の山の手區域と訣れる一番高い坂へ來て、がくりと車體が前屈みになると、東京の中央部から下町へかけての一面の燈火の海が窓から見下ろせる。浪のやうに起伏する灯の粒々やネオンの瞬きは、いま揺り覺まされた眼のやうに新鮮で活氣を帯びてゐる。かの女は都會人らしい昂奮を覺えて、乗りものを騎馬かなぞのやうに鞭つて早く賑かな街へ進めたい肉體的の衝動に驅られたが、またも、むす子と離れてゐる自分を想ひ出すと、急に萎れ返り、晴々しい氣持の昂揚なぞ、とても長くは續かなかつた。

バスはMの學生地區にさしかゝつた。五六人

の學生が乗り込んだ。帽子の徽章をみると、かの女のむす子が入つてゐた學校の生徒たちである。なつかしいと思ふよりも、困つたものが眼の前に現はれたといふうろたへた氣持の方が、かの女の先に立つた。年頃には多少の違ひはあらうが、むす子の中學時代を髣髴させる長い、廊の制帽や、太いズボンの制服のいでたちだけでも、かの女の露つぽくふるへてゐる臉には、すでに毒だつた。かの女は頸を寒さうに外套の襟の中へ埋めた。鹽辛い唾を咽喉へそつと呑み下した。

かの女のむす子はM地區の學校を出て、入學試験の成績もよく、上野の美術學校へ入つた。それから間もなく逸作の用務を機會に、かの女の一家は外遊することになつた。

在學中もあり、師匠筋にあたる先生の忠告もあり、かの女ははじめ、むす子を學校卒業まで日本へ殘して置く氣だつた。

「えゝ、そりやさうですとも、基礎教育をしつかり固めてから、それから本場へ行つて勉強する。これは順序です。だからあたしたち、先へ行つてよく向うの様子を見て來てあげますから、あんたも留守中落着いて勉強してゐなさい。よくつて」

かの女は賢さうにむす子にいい聞かせた。それでむす子もその氣であつた。

ところが、遠し旅の支度を整ふにつれ、かの女は、むす子の落着いた姿と見較べて憂鬱になり出した。たうとうかの女はいひ出した。

「永くもない一生のうちに、しばらくでも親子離れて暮すなんて……先のことは先にして——あんたどう思ひます」逸作は答へた。「うん、連れてかう」

親たちのこの模様がへを聞かされた時、かなり一緒に行き度い心を抑へてゐたむす子は「なんだい、なんだい」と懇くなつて自分の苦笑にむせ乍ら云つた。そして、かの女等は先のことは心にばかりしてしまつて、人に羨まれる一家揃ひの外遊に出た。

足かけ四年は、経つた。かの女の一家は巴里にすつかり馴染んだ。けれども、かの女達はつひに日本へ歸らなくてはならない。

その時彼女は齒を喰ひしばつて、むす子を殘すことにした。むす子は若いいのちの遺瀨ない愛着を新興藝術に持ち、新興藝術を通して、それを培ふ巴里の土地に親しんだ。むす子は、東洋の藝術家の挺身隊を一人で引受けたやうな決心の意氣に燃えて、この藝術都市の藝術社會に深く喰ひ入つてゐた。今更、これを引離すことは、勢ひ立つた若武者を戰場から引上げさすことであり、戀人との同棲から振ぎ外すことだつた。(巴里のテストはもはやむす子の戀人だつた。)それを想像するだけで、かの女は寒氣立つた。むす子にその思ひ遣りが持てるのは、もはやかの女自身が巴里の魅力に憑かれてゐる證據だつた。

ふだん無頓着をよそほつてゐる逸作も、このときだけは、妙に凄い顔付きになつていつた。

「巴里留學は畫學生に取つていのちを賭けても願ひだ。それを、おれは、青年時代に出来なかつた。だから、おれの身代りに、むす子を置いて行く」

だが、かう筋立つた逸作の言葉の内容も、實は、かの女やむす子と同じく巴里に憑かれた者の心情を含んでゐた。人間性の、あらゆる洗練を経た後のあはれさ、素朴さ、切實さ——それが馬鹿らしい程小兒性じみで而も無性格に表現されてゐる巴里。鋭くて嚴肅で伶俐な文化の果てが、むしろ寂寥を底に持ちつゝ取りとめもない痴呆狀態で散らばつてゐる巴里。眞實の美と嘆きと善良さに心身を徹して行かなければならぬ者が、魅着し憑かれずにはゐられない巴里——だが、そこからは必ずしも通俗的な獲物は取り出せないのだ。むす子がどれ程深く喰ひ入りそこから取り出すであらう藝術も、それをあの賢夫人やその他多くの世間人達がむす子に豫言するやうな、いはゆる偉い通俗的の「出世社會」に振りかざし得ようとの期待は、親もむす子も持たなかつた。置く者も置かれる者も、慾や、見榮や、期待ではなかつた。もつとせつば詰つたあはれなあはれな心の狀態だつた。所詮、かの女はむす子と離れて暮さねばならなかつた。

うつし世の人の母なるわれにして
手に觸る子の無きが悲しき

むす子が巴里の北のステイションへ歸朝する親たちを送つて來て、汽車の窓から、たしな小遣ひの中で買つたかの女の送別品のハンケチを汽車の窓に泣き伏してゐるかの女の手へ持ち添へて、顔も上げ得ず男泣きに泣いてゐた姿を想ひ出すと、彼女は絶望的になつて、女ながらも、誰かと決闘したいやうな怒りを覺える。だが、その恨みの相手が結局誰だか判らないので、口惜しさに今度は身體が痺れて來る。

パスは早瀬を下つて、流れへ浮み出た船のやうに、勢を緩めながら賑やかで平らな道筋を滑つて行く。密硝子から間近い兩側の商店街の強い燭光を射込まれるので、車室の中の灯りは急にねほけて見える、その白濁した光線の中をよろめきながら、Mの學生の三四人は談れて車を降り、あとの二人だけは、ちやうどあいたかの女の前の席を踞つて、遠方の席から座を移して來た。かの女は學生たちをよく見ることが出來た。

一人は鼻の大きな色の白い、新派の女形にあるやうな顔をしてゐた。もう一人は、いくら叩いても決して本音を吐かぬやうな、しやくれた強情な顔をしてゐた。

どつちとも、上質の洋服地の制服を着、靴を光らして、身だしなみはよかつた。いゝ家の子に違ひない。けれども眼の色にはあまり幸福らしい光は閃いてゐなかつた。自我の強い親の監督の下に、いのちが芽立ち損じたことにもよく

ある、臆病でチロ／＼した瞳の動き方をしてゐた。かの女は巴里で聞かされたピサロのこどもの話を思ひ出した。

かの女がむす子と一緒に巴里で暮してゐたときのことである。かの女はセーヌ河に近いある日本人の家のサロンで、永く巴里で自活してゐるといふ日本人の一青年に出遇つた。

「僕あ、ピサロの子を知つてゐます。二十歳だが親はもう働かせながら勉強させてゐます」

青年が何気ない座談で聞かせて呉れたその言葉は、かの女に、自分がむす子に負いで勉強さしとくことが、何かふしだらでもあるやうな危惧の念を抱かした。

しかしかの女はずつとかの女の内心で言つた。なるほど、二十歳の青年で稼ぎながら勉強して行くピサロの子どもには感心しないものでもない。しかし、親のピサロには、どうあつても同感出来ない。印象派生き残りの唯一の巨匠で、現在官展の元老であるピサロは貧乏ではあるまい。十分こどもに學資を與へられる身分である。たとひ、主義のためであるとしても、十九や二十のむす子を、親の手から振り放つて、他人の雇傭の鞭の下で稼ぐ姿を、よくも、黙つて見てゐられるものである。それで自分はしやれたピジャマでも着て、匂ひのいい葉巻でもくゆらしてゐるとすれば……そんなちぐはぐな親子の情景によつて、ピサロは主義遂行に満足してゐるのか。かの女は、それから、あのピサロの律儀で詩的な、それでゐてどこか偏屈な畫を見るこ

とが嫌ひになり出した。そしてピサロのむす子を想像すると、いつも親に氣兼ねしてゐる、臆病で素早く動く色の薄い瞳がちらついて来る。

でなければ、主義とか理想とかを丸呑み込みにして、それに盲従する單純すぎて鈍重な眼を輝かす青年が想像されて来る。かの女はまた、かにピサロの親子間を立派なものに考へて見た。

それから更に考へてかの女は、子に對する愛情の方途が間違つてゐるとは思へなかつた。彼女は、子を叱咤したり、苛酷にあつたふばかりが子の「人間成長」に役立つものとは思はない。世には切實な愛情の迫力に依つて目覺める人間の魂もある。叱正や苛酷に瘦せ荒む性情が却つて多いとも云へようではないか。結局かの女の

途方も無い愛情で手擲彈のやうに世の中に飛び出して行つたむす子……「だが、僕は無奈にはなり切れませんよ、僕の心の果てにはいつも母の愛情の姿がありますもの……時代は英雄時代ぢやなし、親の金でいゝ加減に楽しんでゐればそれでいい、僕等なんだけど……偉くなれない云はない母の愛情が、僕をどうも偉くしやうなんです」

と、むす子のかの女の陰で或人に云つたさうである。

二人の學生はかの女の思はくも何も知らずにコソ／＼話してゐたが、道筋が大通りに突き當つて、映畫館のある前の停留場へ來ると急いでバスから降りて行つた。

しばらく、バスは、官廳街の廣い通りを揺れて行く。夜更けのやうな濃い闇の色は、硝子窓を鏡にして、かの女の顔を向側に映し出す。派手な童女型と寂しい母の顔の交つた顔である。

むす子が青年期に達した二三年來、一にも二にもむす子を通して世の中を眺めて來た母の顔である。かの女は、向側の窓硝子に映つた自分の姿を見るのが嫌になつて、寒さうに外套の襟を掻き合せ、くると首を振り向けた。所在なさうに、今度は背中が當つてゐた後側の窓硝子に、眼を近々とすり寄せて、車外を覗いてみる。

湖面を想像させる冷たい硝子の發散氣を透して、闇の遠くの正面に、ほの青く照り出された大きな官廳の建物がある。その建物の明るみから前へ逆に向り返されて威嚴を帯びた銅像が、シルエツトになつて見える。銅像の檢閲を受ける銃劍の參差のやうに並木が蔽り込みこまかに、やはりシルエツトになつて見える。それはかの女が歸朝後間もない散歩の途中、東京で珍しく見つけたマロニエの木々である。日本へ歸つて二月目に、小蠟燭を積み立てたやうなそのほの白い花を見つけて、かの女はどんなに歡んだことであらう。

巴里といふ都は、物憎い都である。嘆きや悲しみさへも小唄にして、心の傷口を洗つて呉れる。娼藥の痺れにも似た中欧の青深い、初夏の晴れた空に、夢のしたりのやうに、あちこちに咲き誇るマロニエの花。巴里でこの木の花の咲く時節に會つたとき、かの女は眼を一度瞑つ

て、それから、ぱつと開いて、まじ／＼と葉の中の花を見詰めた。それから無言でむす子に指して見せた。するとむす子も、かの女のした通り、一度眼を瞑つて、ぱつと開いて、その花を見入つた。二人に身慄ひの出るほど共通な感情が流れた。むす子は、太く徹つた聲でいつた。

「おかあさん。たうとう巴里へ来ましたね」

割栗石の路面の上を、アイスクリーム賣りの車が行／＼と通つて行つた。

この言葉には、前物語があつた。その頃、美男で酒徒の夫は留守勝ちであつた。彼は青年期の有り餘る霸氣をもちあぐみ、元來の弱氣を無理な非人情で押して、自暴自棄のニヒリストになり果ててゐた。かの女もむす子も貧しくて、食べるものにも事缺いたその時分、かの女は聲を泣き噎らしたむす子を慰め兼ねて、まるで諺言のやうにいつて聞かした。

「あーあ、今に二人で巴里に行きませうね、シヤンゼリゼーで馬車に乗りませうねえ」

その時口癖のやうにいつた巴里といふ言葉は、必ずしも巴里を意味してはゐなかつた。極樂といふほどの意味だつた。けれども、宗教的にいふ極樂の意味と、また違つてゐた。かの女は、働くことに無力な一人の病身で内氣な稚ない母と、そのみどり子の餓ゑるのを、誰もかまつて呉れない世の中のであまりのひどさ、みじめさに呆れ果てた。——絶望といふことは、必ずしも死を選ませはしない。絶望の極、死を選むといふことは、まだ、どこかに、それを敢行する意

力が残つてゐるときの事である。眞の絶望といふものは、たゞ、人を痴呆状態に置く。脱力した状態のまゝで、たゞ何となく口に希望らしいものを諺言のやうにいへるだけだ。彼女が當時口にした巴里といふ言葉は、ほんの諺言に過ぎなかつた。しかし諺言にもせよ、巴里と口唱するからには、たしかに、よいところとは思つてゐたに違ひなかつた。或は貧しい青年畫家であつた夫逸作の憧憬がその儘、かの女にさう思ひ込ませたのかも知れない。

將來、巴里へ行けるとか行けまいとか、そんな心づもりなどは、當時のかの女には全然なかつたのだ。第一、この先、生きて行けるものやら、そのことさへ判らなかつた。だがその後ほとんど人生への態度を立て直した逸作の仕事への努力と、かの女に思はぬ方面からの物質の配分があつて、十餘年後に一家揃つて巴里の地を踏んだときには、當然のやうにも思へるし、多少の不思議さが心に泛び、運命が夢のやうに感じられただけであつた。

しかし、この都にやゝ住み慣れて來ると、見るものから、聞くものから、また觸れるものから、過去十餘年間の一心の悩みや、生活の傷手が、一々、抉り出され、また癒されもした。巴里とはまたさういふ都でもあつた。

かの女は巴里によつて、自分の過去の生涯が口惜しいものに顧みさせられると、同時にまた、なつかしまれさへもした。かの女はこの都で、いく度か、しづかに泣いて、また笑つた。しか

し、一ばんかの女の感情の根をこの都に下ろさしたのは、むす子とマロニエの花を眺めたときだつた。かの女の心に、貧しいときの諺言が蘇つた。

「あーあ、今に二人で巴里に行きませうね。シヤンゼリゼーで馬車に乗りませうねえ」そして今はむす子の聲が代つて云ふ。「お母さん、たうとう巴里へ来ましたね」さうだ、復讐をしたのだ。何かに對する復讐をしたのだ。そしてかの女に復讐をさして呉れたのはこのマロニエの都だ。

かういふ氣持からだけでも、十分かの女は、この都に、愛着を覺えた。よく、物語にある、仇討の女が助太刀の男に感謝のこゝろから、戀愛を惹起して行く。そんな氣持だつた。けれども、かの女は歸國しなくてはならない。かの女は元來、鄉土的な女であつて、永く異國の土に離れてはゐられなかつた。旅費も乏しくなつた。逸作も日本へ歸つて働かなければならない。そこで、せめて、かたみに血の繋がらぬむす子を残して、なほも、この都とのつながりを取りとめて置く。そんな遺瀾ない親達の欲情も手傳つて、むす子は巴里に残された。

「お母さん、たうとう巴里に來ましたね」

今後何年でもむす子のゐるかぎり、毎年々々、マロニエが巴里の街路に咲き進んであらう。そしてたとひ一人になつても、むす子は「お母さん、たうとう巴里に來ましたね」と胸の中で、いふだらう。だが、それが母と子の過去の運命

に對する恨みの償却の言葉であり、あの都に對するかの女とむす子との愛のひめ言の代りとは誰が知らう。

さうだ、むす子を巴里に残したのは一番むす子を手放し度くない自分が——そして今は自分と凡ての心の動きを同じくするやうになつたむす子の父が——さしたのだ。

かの女は、なほも、こんな事を考へながら、丸の内某省前の銅像のまはりのマロニエの木をよく見定め度い氣持で、外套の袖で、バスの窓硝子の曇りを拭いてゐると、車體はむんずと乗客を揺り上げながら、急角度に曲つた。そのひまには窓外の闇はマロニエの裸木を、銅像もろとも掬ひ去つた。かの女は席を向き直つた。運轉臺や昇降口の空間から、眩しく、丸の内街の盛り場の夜の光が燦き入つた。

喫茶店モナミは、階下の普請を仕變へたばかりで、電燈の色も浴後の肌のやうに爽やかだつた。客も多からず少からず、椅子、テーブルにまぐばられて、ストローを止めたあとも人の滲氣で程よく氣温を室内に漂はしてゐた。季節よりやゝ早目の花が、同じく季節よりやゝ早目の流行服の男女と色彩を調へ合つて、こゝもすでに春だつた。客席には喧しい話聲は一筋もなく、室全體として靜物の繪のしとやかさを保つてゐた。とき／＼店の奥のスタンドで、玻璃蓋にソーターのフラッシュする音が、室内の春の靜物圖に揮發性を與へてゐる。

人を關ひつけないときは、幾日でも平氣でうちやらかしとくが、いざ關ふ段になるとうるさいほど世話を焼き出す、畫描き氣質の逸作は、この頃、かの女の憂鬱が氣になつてならぬし、しかつた。それで間がな隙がな、かの女を表へ連れ出す。まるで病人の氣保養させる積りでもあらしく、機嫌を取つてまで連れ出す。しかも單純な彼はいつも銀座である。そしてモナミである。かの女を連れ出して、この喫茶店のアカデミックな空氣の中に游がせて置けば、かの女は立派に愉快を取り戻せるものと信じ切つてゐるらしく、かの女に茶を與へ、つまみ物を取つて與へた後は、ぼかんとして、勝手な考へに耽つたり、洋食を喰べたり、元氣で愛想よくテーブル越しに知人と話し合ふ。

今も、「やあ」と彼が挨拶したので、かの女が見ると、同じやうな「やあ」といふ朗らかな挨拶で應じて、一人の老紳士が入つて來た。紳士がインパネスの小脇に抱へ直したステッキの尖で彈かれるのを危がりながら、後に細身の青年が隨いてゐた。

老紳士は、眼鏡のなかの瞳を忙しく働かせながら、あたりの客の立て込みの工合では、別に改つた挨拶をせずとも、まだ空のある逸作等のテーブルに席を取つても不自然ではないと、すぐ見て取つたらしい、世馴れた態度で、無造作に通路に遊んでゐた椅子を二つ、逸作等のテーブルに引き寄せた。自分が先へかけると、今度は、青年を自分の傍に掛けさせた。青年は瘦せ

てゐて、前屈みの身體に、よい布地の洋服を大事さうに着込んでゐた。髪の毛をつや／＼と撫でつけてゐることを氣まり惡がるやうに、青年は首を後へぐつと引いて、うつ向いてゐた。青年は、父に促されて、父を通して、かの女たちに、かすかな挨拶をした。

老紳士が、かの女たちに話しかける聲音は、場内が一番大きく響いたが、誰も聞き咎める様子もなかつた。講演ですつかり聲の灰汁が脱けてゐる。その上、この學者出の有名な社會事業家は、人格の丸味を一番聲調で人に聞き取らせた。老紳士は世間的には逸作の方に馴染が深かつたが、しかし、職務上からは、はじめて遇つたかの女の方にかね／＼關心を持つてゐたらしい。それで逸作と暫く世間話をしながら、機會を待つもののやうだつたが、やがて、さも興味を探るやうに、かの女をつく／＼と見詰めていつた。

「不思議ですよ。おくさんは。お若くて、まるでモダン・ガールのやうだのに大乘哲學者だなんて……」

かの女は、よく、かういふ意味の言葉を他人から聞かされてゐる。それでまたかと思ひながら、しかし、この識者を通してなら、一般の不審に向つても答へる張合ひがあるといつた氣持で、やゝ公式に微笑みながらいつた。

「大乘哲學をやつてますから、私、若いのぢやございせんかしら。大乘哲學そのものが、健康ですし、自由ですし」

すると老紳士は、幼年生に巧みにいひ返された先生といった快笑を顔中に漲らせて、頭を掻いた。「やあ、これは、参つた」

けれども、かの女は冗談にされてはたまらないと思ひ、まじめな返事をした自分の不明を今更後悔する沈黙で、少し情ない氣持を押へてゐると、さすがに老紳士は氣附いて、
「なる程な。そこまで伺へば、よく判りますて」

といつて、下手から、かの女の氣持のバランスを取り直すやうにした。かの女は少し氣の毒になつて、ちよつと頭を下げた。

すると、老紳士は、そのまゝ眞面目な氣分の方へ誘ひ込まれて行つて、視線を内部へ向けながら、獨言のやうにいつた。

「大乘哲學の極意は全くそこにあるんでせうなあ。ふーむ。だが、そこまで行くのがなかく大變だぞ」

そしてそのことと自分のむす子とが、何かの關係でもあるかのやうに、むす子のこけた肩を見た。むす子は青年にしては、あまりに行儀正しい腰掛け方をしてゐた。——かの女はこの時、このむす子と前、母親を失つてゐるのを何かの雜誌で見つてゐたと思ひ出された。

老紳士は深刻な顔つきで、アイスクリームの匙を口へ運んでゐたが、たちまち、本來の物馴れた無造作な調子に返つた。

「たい、おくさんのやうな、華やかなそして詩人肌の方が、また間違つてゐるかも知れんが、

まあ、兎に角、どうして哲學なんか縁がおありでしたな」今度は社會教育の參考資料にとでもいつた調査的な聞き振りがつた。

かの女がやゝ怯えてゐる様子をみて逸作が繰りよく答へた。

「つまり、これがすな。性質があんまり感情的なんで、却つて性質とまるで反對な哲學なんて、理智的な方向のものを求めたんでせうなあ。つまり、女の本能の無意識な自衛的手段でせうなあ」

「ははあ、そして、それは、何年前位から始めなかつた」

場所柄にしては、あんまり素朴に一身上の事實を根問ひ葉問ひされるものと、かの女はちよつと息を詰めて口を結んだが、ふだん質問する人達には誰へも正直に云つてゐる通りに云つた。

「二十年程まへ、感情上の大失敗をしました。研究はそれ以來なのです」

かの女がいひ終るか終らないかに、老紳士は「ははあ、それは好い、ふーむ、なるほど」

そして、伸び上るやうに室内をきよとく見廻した。

感情上のはなしと聞いて、よく世間にある老人のやうに、うるさいものと思ひ取り、かういふ態度で、暗に、打ち切りを宣告したのかも知れない、こまかい心理の話など、どうせ人に理解して貰へやしまいと普段から諦めをつけてゐるかの女は、老紳士の「ははあ、それは好い」と片付けた、そのアツサリし方が案外氣に入つ

て、少しをかしくなつた。そして、この親を持つ子供はどんな子供かと、微笑しながら、かの女はあらためてまた青年に眼を移した。

煙草も喫はないそのむす子は、アイスクリームを丁寧な喰べ終へてから、兩手を膝の上へ戻し、弱々しい視線をテーブルの上へ落して、熱心でも無關心でもない様子で、父親と知人の談話を聞いてゐた。

かの女はこの無力なおとなしさに對して、多少、解説を求めたい氣持になつた。

「御子息さまは……學校の方は……何ですか」
うつかり、何處の學校を、いつ卒業したかと訊きさうになつて、こんな成熟不能の青年では、ひよつとしたら、どの學校も覺束なくはないかと懸念して、遠慮の言葉を濁した。すると案の定、老紳士は、

「どうも弱いの、これは中學だけで、よさせましてな」

と云つたが、格別息子未成熟に心を傷めたり、ひけ目を感じてゐる様子も見せず、普通な大きい聲だつた。それから質問のよい思ひ付きを見付けたやうに、

「ときにお宅のむす子さんは……たしか、巴里でしたな、まだ、お歸りにならんかな」

と首を前へ突き出して來た。そしてこの種の社會事業家によくある好意をもつて他人の事情を打診する表情で「お子さんはもう巴里に何年ぐらゐになりますかな。よほど永いやうに思ひますが——」と言つた。

かの女は、何となく老紳士の息子に對して、氣兼ねが出て、自分のむす子の遊學の話など、すぐ返事が出来なかつた。また逸作が代つていつた。

「僕等が、昭和四年に洋行するとき、連れて行つたまゝ、殘して來たのです」

「まだ、お年若でせうに。中學に出られましたかな」

この老紳士は、中學教育に餘程力點を置いてゐるらしい。そして逸作からむす子の學歴の説明を聽いてはつとしたやうに、

「中學も立派に卒業して、美術學校に入られた……ほほう、そして美術學校の途中から外國へ出られたといふんですね。しかし、何しろ洋畫はあちらが本場だから仕方がない」

「學校の先生方も、基礎教育だけは日本ですとずいぶん止められたんですが、どうにもこれ（かの女を指して）が置いて行けなかつたんで」

すると老紳士は、好人物の顔を丸出しにして褒めそやすやうにいつた。

「なるほど、ひとりむす子さんだから、それも無理はない」

かの女は他人のことばかりに思ひやうが良く、自分のむす子には一向無關心らしい老紳士が、粗つぽく思へて興醒めた。が、ひよつとすると、この老紳士は自分の氣持を他人の上に移して、心やりにする舊官僚風の人物にまゝある氣質の人で、内心では案外、寸刻の間も、自分のむす子の上にいたはりの眼を離さないのかも

知れない。老父が青年のむす子と二人で、春の夜、喫茶店に連れ立つて來るなどといふ風景も、氣をつけて見れば、しんみりした眺めである。

かの女は、だん／＼老紳士に對する好感が増して行き、慈しむやうな眼ざしで青年の姿を眺めてゐると、老紳士は、暗黙の中にそれを感謝するらしく、

「だが、よく、むす子さんを一人で置いて來られたまはた、巴里のやうな誘惑の多い處へ。まだ年若な方を、あすこへ一人置かれることは餘程の英斷だ」

老紳士は曾て外遊觀察の途中、彼の都へ數日滞在したときの見聞を思ひ出して來て、むす子の青年には知らしたくない部分だけは獨逸語など使つて、一二、巴里繁昌記を語つた。老紳士の顔は、すこし弾んで、眉根一つ動かさず、孤獨でかしこまつてゐた。

賑やかな老紳士はむす子を連れて、モナミを出て行つた。あとでかの女は氣が萎んで、自分が老紳士にいつた言葉などであれや、これやと、神經質に思ひかへして見た。老紳士が年若なむす子を巴里に置く危險を喋つたとき、かの女は「もし、そのくらゐで危險なむす子なら親が傍で監督してゐましても、結局ろくなものにはならないぢやありませんかしら」と答へた自分の言葉が酷く氣になり出した。それは、こまじやくれてゐて、悪く氣丈なところがある言葉だつた。どうか老紳士も之だけは覺えてゐて呉れな

いやうと願つてゐると、そのあとから、ふいと老紳士がいつた、「一人で、よく置いて來られたまはた」といふ言葉がまた浮び出て來た。すると、むす子は一人で遠い外國に、自分はこの東京に歸つてゐる、その間の距離が、現實にまざまざと意識されて來た。もういけない。しんと淋しい氣持が、かの女の心に沁み擴つて來るのだつた。

かの女が、いよ／＼巴里へむす子を一人置いて主人逸作と歸國するとき、必死の氣持が、かの女に一つの計畫をたてさせた。かの女はむす子と相談して、むす子が親と訣れてから住む部屋の内側の裝置を決めにかゝつた。むす子が住むべき新しいアパートは、巴里の新興の盛り場、モンパルナスから歩いて十五分ほどの閑靜なところに在つた。

そこは舊い貧民街を蠶食して、モダンな住宅が處々に建ちかゝつてゐるといふ土地柄だつた。かの女はむす子の棲むアパートの近所を見て歩いた。むす子が、起きてから珈琲を沸すのが面倒な朝や、夜更けて歸りしなに立ち寄るかも知れない小さい箱のやうなレストランや、時には自炊もするであらう時の八百屋、パン屋、雜貨食料品店などをむす子に案内して貰つて、一立ち寄つてみた。ある時はとほ／＼と、ある時は威勢よく、また、かなりだらしない風で、親に貰つた小遣ひをズボンの内ポケットにがちやがちやさせながら、これ等の店へ買ひに入る

様子を、眼の前のむす子と、自分のみない後のむす子とを思ひ較べながら、かの女はそれ等の店で用もない少しの買物をした。それ等の店の者は、みな、太様で親切だった。

「割合に、みんな、よくして呉れるらしいね」

「僕あ、すぐ、この邊を牛耳つちやふよ」

「いくら馴染みになつても決して借を拵へちゃいけませんよ、嫌がられますよ」

それからアパートへ引返して、昇降機が、一週間のうちには運轉し始めることを確め、階段を上つて部屋に行つた。

しつとりと落着きながら、ほの／＼と明るい感じの住居だった。畫學生の生活らしく、畫室の中に食卓やベッドが持ち込まれて、その本部屋の外に可愛らしい臺所と風呂がついてゐた。「ほんたうに、いゝ住居、あんた一人ぢやあ、勿體ないやうねえ」

かの女はさういひながら、うつかりしたことを云ひ過ぎたと、むす子の顔をみると、むす子は齒牙にかけず、晴々と笑つてゐて、「いゝものを見せませうか」と、臺所から一挺日本の木鉢を持ち出した。

「夏になつたらこれで、ぢよきん／＼やるんだね。植木鉢を買つて来て」

「まあ、どこからそんなものを。お見せよ」

「友達のフランス人が蚤の市で見付けて来て、自慢さうに僕に呉れたんだよ。をかしな奴さ」

かの女は、そのキラ／＼する鉄の刃を見て、むす子が親に訣れた後のなにか青年期の鬱屈を

晴らす爲にぢよき／＼鳴らす刃物かと思ひ、ちよつとの間きよつとしたが、さりげない様子で根氣よくむす子に室内の家具の配置を定めさせた。浴室の境の壁際に寢臺を、それと反對の室の隅にピアノを据ゑて、それとあまり遠くなく珈琲を飲むテーブルを置く。しまひに、茶道具の置き場所まで、こまかく氣を配つた。

それは、むす子の生活に便利なやう、母親としての心遣ひに相違なかつたが、しかし、肝腎な目的は、かの女自身の心覺えのためだった。かの女は日本へ歸つて、むす子の姿を想ひ出すのに、むす子が日々の暮しをする部屋と道具の模様や場取りを、しつかり心に留めて置きたかつた。それらの道具の一つ一つに體の位置を定めて暮してゐるむす子の室内姿を鮮明に想ひ出せるやう、記憶に取り込むのであつた。むす子も、むす子の父親も、かの女の突然なもの／＼しい畫策の幼稚さに呆れ乍ら、また名案であるかのやうに感心もした。

それからまた、遠く離れて居れば、むす子の健康が、一番心配だとしきりに案じるかの女を案心させるため、むす子のかの女達が、英國や獨逸へ行つて居る間に出來た友人で、巴里でも有名なる外科病院の青年醫を兩親に見せることにした。かの女達は、むす子を頼んで置くその青年醫を一夕、レストランへ招待した。かの女達は、魚料理で有名なレストランへ先に行つてゐた。むす子があとから連れて來た青年は、むす子より丈が三倍もありさうな、そして、髪も

頗る眼もいろ艶の好いラテン系的美丈夫だった。かの女はこんな出來上つた美丈夫が、むす子の友達だなんて信じて好いのかと思つた。むす子を片手で掴んで振り廻しさうに思へた。「なに、ほんやりしてんの、お母さん」むす子は、美男子に見惚れてゐるやうな場合何にも考慮に入れない母親の稚純性を知つて居てくすり／＼と笑つた。美青年も何かしら好意らしく笑つた。美青年の笑顔は、まるで子供だった。そして彼女は安心した。柄こそ大きくても青年は醫科大學を出たばかりで二十五歳の助手だった。さうは云つても二十歳ばかりの異國畫學生のむす子が、よくこんなしつかりした青年を友人に獲得したものだといふにだらしのないやうな自分のむす子のどこかにひそむ何かの技倆がたのもしく思はれた。かの女の小柄なむす子——細くて鋭い眼と眼とが離れ、ほそ面のしまつた顔に立派過ぎる鼻と口、だが笑ふ眉がちよつと下りたるとの親の身としては何かこの子に足らぬ性分があるのではないかと、不慣れ可愛ゆさが増すのだつた。

よく語り、不慣れ可愛ゆさが増すのだつた。青年は決して人ずれがして居なかつた。この青年の親達はどんな人か、どんな育ちかと、かの女は女性にありがちな通俗的な思案にふけて居るうちに、自分のむす子が赤兒のとき、あんまりかの女達が若い親だったことを思ひ出した。若くもあり、生來子を育てる親らしい技巧を持ち合せて居ない自分達を親に持つたむす子の赤兒の時のみじめさを想ひ出した。さういふ自分

達の、まして、まだ親らしい自覺も芽ぐまれないうちに親になつて途方にくれて居るなかで、いつか成人して仕舞つたむす子の生命力の強さに驚かれる。感謝のやうな氣持がその生命力に向つて起る。だが、その生命力はまた子の成長後かの女の愛慾との應酬にあまり迫つて執拗だ。かの女は、持つて居たフォークの先で、何か執拗なものを追ひ拂ふやうな手つきをした。自分の命の傍に、いつも執拗に佇んで居る複数の影のやうなものを一瞬感じたとき、かの女の現實の眼のなかへいつもむす子の細い鋭い眼が飛び込んで来て、「なにぼんやりしてんの」と薄笑ひした。青年もかの女を見て「ママン泣いて居る？」と薄笑ひし乍らむす子に聞いた。

「あなたんこの息子さんを、モンバルナスのキヤフエでよく見かけますよ」と、薄い旅費で行動的に世男一周を企て巴里まで来て、まだ虚勢とひがみを捨て切らない或る老教育家が、かの女等の親子批判にいどみ込んで来た。むす子が親の金でモンバルナスに出掛けて行つてゐるのを知らないのかといふ口調だつた。かの女達はよく知つてゐた。知り過ぎてゐた。といふよりも、夜にでもなつたらモンバルナスのキヤフエへでも出掛けて行き、分相應愉快に過ぎなさいといふ氣持で、一人置いて行く子のアパートを、モンバルナスからあまり遠くない地點に選んでやつたくらゐだ。巴里の味はモンバルナスのキヤフエにあるとさへ云はれてゐるところをむす

子から封じて、巴里へ置いて行く意義はない。

若くして親には別れ外つ國の雪降る街を歩むかあはれ。

一人巴里に置かれることが、むす子の願ひ、親の心柄であるとは云へ、二十歳そこへで親に別れ、ひと暮れ果ててキヤフエへさへ行かれない子にして置けるだらうか。かの女自身、むす子と別れて後の淋しい生活を想像して見て、むす子が行く華やかなモンバルナスのキヤフエの夜の時間を想ふことが、むしろ、かの女の慰安でさへある。むす子は純藝術家だ、畫家だ、なにも修身の先生にでもするのぢやなし……かの女にかういふ考へもあつた。

東京銀座のレストラン・モナミのテーブルに倚りかゝつて、巴里のモンバルナスのキヤフエをまぎ／＼と想ひ浮べることは、店の設備の上からも、客種の違ひからも、随分無理な心理の働かせ方なのだが、かの女のロマン性にかゝるとそれが易々と出來た。

ふだんから、かの女は地球上の土地を自分の氣持の親疎によつて、實際の位置と違つた地理に置き換へてゐた。つまり感情的にかの女獨特の世界地圖が出來てゐた。その奇抜さ加減にときどき逸作も、かの女自身すら驚嘆することがあつた。アメリカは、ほとんど沙漠の中の蠻地のやうに遠く思へ、歐洲はすぐ神戸の先に在るやうに親しげな話し振りをかの女はした。だか

ら、四年前一家を擧げて歐洲へ遊學に出掛ける朝も、一ばん氣輕な氣持で船に乗つてたのはかの女だつた。かの女は和装で吾妻下駄をからから棧橋に打ち鳴らしながら、まるで二三日の旅に親類へでも行くやうな安易さだつた。

かの女はまた情熱のしこる時は物事の認識が極度に變つた。主觀の思ひ詰める方向へ環境はする／＼手繰られて行つた。

身體に一本の太い棒が通つたやうに、むす子のことを思ひ詰めて、その想ひ以外のものは、自分の肉體でも、周圍の事情でも、全くかの女から存在を無視されてしまふときに、むす子のゐる巴里は手を出したら掴めさうに思へる。それほど近く感じられる雲圍氣の中に、あべき筈のむす子がゐない。眼つきらしいもの、微笑らしいもの、癖、聲、青年らしい手、きれ／＼にかの女の胸に閃きはするが、かの女の愛感に馴染まれたそれ等のものが、全部として觸れられず、抱へ取れない、その口惜しさや悲しさが身悶えさせる。ふとこゝでかの女の理性の足を失つた魂のあこがれが、巴里の賑やかさといふ連想から銀座へでも行つたらむす子に會へさうな氣を彼女にさせる。さすがに彼女も一二度はまさかと思ひ返してみられけれども、今度は、あこがれだけがずん／＼募つて行つて、せめてあこがれを納得させるだけでも銀座へ踏み出してむす子の佛を探さなければ居たくまれないほど強い力が込み上げて来る。で、ある時はむしろ、その女の方から進んで銀座へ出たがるので、そ